

# 横浜市における10代後半の青年の生活と意識 (1)

— 高校生・高校中退者・非行青年の比較 —

小沢一仁\*・高木秀明\*\*・平出彦仁\*\*

The lives and feelings of the latter half of teen-agers  
in Yokohama City (1)

— Comparisons among high school students,  
those left high school and juvenile delinquents —

Kazuhito OZAWA, Hideaki TAKAGI & Hikohito HIRAIDE

The purpose of this research is to compare the lives and feelings among high school students, those left high school and juvenile delinquents. According to E.H.Erikson and P. Blos, the focus of human relationship transfers from family to friends. The results are as follows : 1) High school students had good feelings about their families ; 2) Juvenile delinquents had good times with their friends of both sexes, and had bad feelings about their families ; 3) A half of adolescents left high school preferred to be alone and were narcissistic. These findings were discussed in relation to transfer of the focus of human relationship in the adolescence.

## 目 的

90年度の高校中退者は12万3千人余りとなり、過去最高であるという文部省の調査報告がなされた。高校中退は過熱化する進学競争の裏の側面として問題となっている。また、未成年者が引き起こす事件も世間を騒がせており、非行の問題も注目されている。本研究は、横浜市から研究助成金を受け横浜市における10代後半の青年の生活と意識について調査した研究の一貫である。そこでは、高校中退者および補導された青年の生活の実態・意

---

\* 帝京学園短期大学

\*\* 横浜国立大学

識・行動様式を、高校に通っている青年との比較の中で明らかにすることが大きな目的である。その中で、本研究では高校生・高校中退者・非行青年の対人関係について明らかにすることを目的とする。それぞれの青年が、同性及び異性の友人、父親・母親とどのような関係にあるかについて明らかにしていきたい。

## 方 法

横浜市内の高校在学学生・高校中退者・警察に補導された青年の3群に、対人関係を調べる質問紙を実施した。対人関係の内容は、現在と中学時代における、同性・異性の友人の数、同性・異性の友人関係への満足度、父母との関係の良しあし、家庭の雰囲気についてである。高校中退群は、高校中退者に郵送で依頼した。補導群は、警察署に依頼し補導された青年に実施した。高校群は、高校教諭に協力を依頼し、学校で実施した。なお、中退者からの回収率は、約25%であった。

調査時期は、平成元年5月から9月である。

## 結 果

各群の分布は表1に示す通りである。加えて、中退群の高校中退後の進路を尋ねた結果を表2に示した。次いで、各群の年齢分布を表3に示した。

表1 各群の分布

	高校群 (%)	補導群 (%)	中退群 (%)	計
男 子	979 (58.5)	80 (52.3)	38 (77.6)	1097
女 子	694 (41.5)	73 (47.7)	11 (22.4)	778
計	1673	153	49	1875

表2 中退群の高校中退後の進路

	全 体	男 子	女 子
定 職	22	18	4
アルバイト	13	9	4
仕事なし	7	5	2
全日制高校	1	1	0
定時制高校	2	1	1
通信教育	5	5	0

表3 各群の年齢分布

	高校群(%) 〈男・女〉	補導群(%) 〈男・女〉	中退群(%) 〈男・女〉	計
15 歳	393 (23.5) 〈227・166〉	32 (20.9) 〈20・12〉	0 (0.0) 〈0・0〉	425 (22.7) 〈247・178〉
16 歳	518 (31.0) 〈295・223〉	50 (32.7) 〈25・25〉	6 (12.2) 〈3・3〉	574 (30.7) 〈323・251〉
17 歳	496 (29.7) 〈279・217〉	46 (30.1) 〈21・25〉	21 (42.9) 〈19・2〉	563 (30.1) 〈319・244〉
18 歳	204 (12.2) 〈138・66〉	17 (11.1) 〈10・7〉	14 (28.6) 〈12・2〉	235 (12.6) 〈160・75〉
19 歳	58 (3.5) 〈39・19〉	8 (5.2) 〈4・4〉	8 (16.3) 〈4・4〉	74 (4.0) 〈47・27〉

## 1. 友人関係

## (1) 同性の友人

まず、「あなたは中学時代に親しい同性の友だちがいましたか？」について尋ねた結果を表4にあげた。これを見ると、高校群と中退群では友人の数を2～3人だったと答えた者が2割弱で、4人以上だったと答えた者が7～8割いた。これに対し、補導群では2～3人だったと答えた者が3割で4人以上だったと答えた者が6割であった。このことから、どの群も中学時代の同性の友人はいたが、補導群でその数が若干少ない傾向にあったといえる。

表4 中学時代の親しい同性の友人の数

	高校群(%) 〈男・女〉	補導群(%) 〈男・女〉	中退群(%) 〈男・女〉
1 人	40 (2.4) 〈27・13〉	4 (2.6) 〈2・2〉	0 (0.0) 〈0・0〉
2～3 人	308 (18.5) 〈151・157〉	50 (32.9) 〈28・22〉	9 (18.4) 〈7・2〉
4人以上	1268 (76.2) 〈756・512〉	92 (60.5) 〈47・45〉	39 (79.6) 〈30・9〉
いなかった	47 (2.8) 〈39・8〉	6 (3.9) 〈3・3〉	1 (2.0) 〈1・0〉

現在の同性の友達の数については表5に示した。質問文は「あなたは現在、親しい同性の友だちがいますか？」である。これを見ると、高校群で4人以上と答えた者が7割以上いたのに対し、中退群と補導群では4人以上の者は5割強であり、また2～3人と答えた者が3割から4割弱いた。どの群も友達がいらないという者が1割以下であるが、中退群と

補導群では、高校群に比べ現在の同性の友人の数は少ない傾向にあるといえる。

表5 現在の親しい同性の友人の数

	高校群 (%) 〈男・女〉	補導群 (%) 〈男・女〉	中退群 (%) 〈男・女〉
1 人	37 (2.2) 〈21・16〉	7 (4.6) 〈3・4〉	2 (4.2) 〈1・1〉
2 ~ 3 人	297 (17.8) 〈166・131〉	51 (33.6) 〈22・29〉	18 (37.5) 〈16・2〉
4 人以上	1273 (76.5) 〈737・536〉	85 (55.9) 〈50・35〉	25 (52.1) 〈18・7〉
い ない	58 (3.5) 〈50・8〉	9 (5.9) 〈4・5〉	3 (6.3) 〈3・0〉

現在の同性の友人との関係に対する満足度を「あなたは現在の同性の友人関係に満足していますか?」という質問文で尋ねた。その結果を表6に示す。「少し不満」及び「とても不満」と答えた者を合わせると各群ともに1~2割程度であり、概ねどの群も同性の友人とのつきあいには満足しているといえる。

表6 現在の同性の友人への満足度

	高校群 (%) 〈男・女〉	補導群 (%) 〈男・女〉	中退群 (%) 〈男・女〉
とても満足	530 (32.1) 〈290・240〉	51 (34.0) 〈27・24〉	15 (31.9) 〈12・3〉
まあ満足	906 (54.8) 〈550・356〉	80 (53.3) 〈44・36〉	23 (48.9) 〈18・5〉
少し不満	167 (10.1) 〈89・78〉	17 (11.3) 〈8・9〉	5 (10.6) 〈4・1〉
とても不満	50 (3.0) 〈37・13〉	2 (1.3) 〈0・2〉	4 (8.5) 〈3・1〉

以上、同性の友人についてまとめると、どの群においても中学時代・現在ともに友人がいないと答えた者は1割以下であり、同性の友人はいるといえる。また、どの群も同性の友人関係に不満を感じている者は1~2割であり、概ね友人関係に満足しているといえる。しかし、その数を見ると、高校群においては中学時代と現在で一貫して友人の数が4人以上の者が7割以上いた。これに対して、中退群では中学時代は友人の数が4人以上と答えた者が7割以上いたが、現在は5割になっていた。このことから、中退群では中学時代から現在へかけて友人の数が減少している傾向にあるといえる。補導群では、

中学時代及び現在ともに友人の数は2～3人と答えた者が3割強、4人以上と答えた者が6割であった。補導群は高校群と比べると一貫して友人の数は少ない傾向にあるといえる。

## (2) 異性の友人

中学時代の異性の友人の数を「あなたは中学時代に親しい異性の友だちがいましたか?」という質問文で尋ねた。その結果を表7に示した。いなかったと答えた者が高校群で3.5割、補導群と中退群で2割いた。高校群では、他の群に比べ中学時代に異性の友達がいなかった者が若干多い傾向にあるといえる。

表7 中学時代の親しい異性の友人の数

	高校群(%) 〈男・女〉	補導群(%) 〈男・女〉	中退群(%) 〈男・女〉
1 人	105 (6.4) 〈68・37〉	22 (14.5) 〈10・12〉	2 (4.2) 〈1・1〉
2～3 人	422 (25.9) 〈214・208〉	47 (30.9) 〈23・24〉	15 (31.3) 〈12・3〉
4人以上	538 (33.0) 〈334・204〉	51 (33.6) 〈23・28〉	21 (43.8) 〈15・6〉
いなかった	567 (34.7) 〈336・231〉	32 (21.1) 〈23・9〉	10 (20.8) 〈9・1〉

現在の異性の友人の数を「あなたは現在、親しい異性の友達がありますか?」で尋ねた。結果を表8に示した。現在の異性の友人はいないと答えた者が、補導群では2割弱なのに対し、高校群と中退群では4割以上いた。補導群では他の群と比べ異性の友達との交際がある者が多いといえる。

表8 現在の親しい異性の友人の数

	高校群(%) 〈男・女〉	補導群(%) 〈男・女〉	中退群(%) 〈男・女〉
1 人	124 (7.6) 〈71・53〉	39 (25.7) 〈20・19〉	3 (6.3) 〈1・2〉
2～3 人	312 (19.1) 〈155・157〉	40 (26.3) 〈19・21〉	10 (20.8) 〈9・1〉
4人以上	400 (24.5) 〈246・154〉	47 (30.9) 〈23・24〉	14 (29.2) 〈9・5〉
いない	797 (48.8) 〈486・311〉	26 (17.1) 〈17・9〉	21 (43.8) 〈19・2〉

現在の異性の友人への満足度を、「あなたは現在の異性の友人関係に満足していますか?」という質問文で尋ね、結果を表9に示した。「少し不満」及び「とても不満」と答えた者を合わせると、高校群では4割強、中退群で4割弱であった。これに対し、補導群では2割以下であった。高校群と中退群では、異性の友達との交際に不満を感じている者が、補導群と比較すると多いといえる。

表9 現在の異性の友人への満足度

	高校群 (%)	補導群 (%)	中退群 (%)
	<男・女>	<男・女>	<男・女>
とても満足	261 (18.2) <165・96>	40 (29.4) <18・22>	8 (20.0) <8・0>
まあ満足	545 (38.0) <274・271>	71 (52.2) <39・32>	17 (42.5) <10・7>
少し不満	329 (22.9) <175・154>	16 (11.8) <6・10>	6 (15.0) <3・3>
とても不満	300 (20.9) <220・80>	9 (6.6) <5・4>	9 (22.5) <9・0>

以上、異性の友人についてまとめると、高校群では異性の親しい友人がいない者が中学時代で3.5割から、現在では5割弱となり、高校になって親しい異性の友人がいない者が増加している。中退群でも、異性の友人がいない者が中学時代は2割であったのが、現在では4割強と増加している。このことは、異性との満足度で、不満を感じている者が、高校群と中退群で4割前後いたことと関連していると考えられ、親しい友人がいない者が不満を感じていると予想できる。これに対して、補導群では、中学時代と現在において親しい異性の友人がいない者が2割程度であり変化がなく、異性の友人との関係に不満を感じている者が2割しかいなかった。このことから、補導群は、高校群及び中退群と比較して異性の友人の数が多く、そのつきあいに満足している者が多いといえる。

## 2. 父親・母親との関係及び家庭の雰囲気

### (1) 中学時代の父親・母親との関係

中学時代の父親との関係を「あなたは中学時代にお父さんとうまくいっていませんか?」という質問文で尋ねた結果を、表10に示す。「とてもうまくいっていた」及び「まあうまくいっていた」と答えた者を合わせると、中学時代父親との関係が良かった者は高校群で7.5割、中退群で6割、補導群で4割強であった。特に補導群において中学時代に父親との関係がよくなかった者が半分以上いることは注目される。

表10 中学時代の父親との関係

	高校群 (%) 〈男・女〉	補導群 (%) 〈男・女〉	中退群 (%) 〈男・女〉
とてもうまくいっていた	402 (25.3) 〈235・167〉	8 (6.0) 〈5・3〉	9 (20.0) 〈8・1〉
まあうまくいっていた	809 (50.9) 〈484・325〉	49 (36.6) 〈26・23〉	18 (40.0) 〈16・2〉
あまりうまくいっていなかった	256 (16.1) 〈143・113〉	50 (37.3) 〈29・21〉	12 (26.7) 〈11・1〉
まったくうまくいっていなかった	123 (7.7) 〈70・53〉	27 (20.1) 〈11・16〉	3 (13.3) 〈1・5〉

中学時代の母親との関係を「あなたは中学時代にお母さんとうまくいっていましたか?」という質問文で尋ねた結果を、表11に示す。「とてもうまくいっていた」及び「まあうまくいっていた」と答えた者を合わせると、中学時代の母親との関係がうまくいっていた者は、高校群で8.5割、中退群で7割、補導群で6割であった。このことから若干補導群において中学時代の母親との関係がよくなかった者が多い傾向がみられるといえる。

表11 中学時代の母親との関係

	高校群 (%) 〈男・女〉	補導群 (%) 〈男・女〉	中退群 (%) 〈男・女〉
とてもうまくいっていた	500 (30.5) 〈253・247〉	15 (10.4) 〈9・6〉	10 (22.7) 〈7・3〉
まあうまくいっていた	890 (54.4) 〈546・344〉	70 (48.6) 〈34・36〉	21 (47.7) 〈17・4〉
あまりうまくいっていなかった	179 (10.9) 〈111・68〉	38 (26.4) 〈21・17〉	9 (20.5) 〈6・3〉
まったくうまくいっていなかった	68 (4.2) 〈46・22〉	21 (14.6) 〈10・11〉	4 (9.1) 〈4・0〉

以上まとめると、中学時代の親との関係では、どの群も母親と比べて父親との関係が悪かった者が多い。しかし、各群においてその比率が異なり、高校群、中退群、補導群の順に関係が悪い者が多くなる。特に、補導群では母親との関係が悪かった者が4割、父親との関係が悪かった者が6割近くいたことは、問題である。

## (2) 現在の父親・母親との関係、家庭の雰囲気

現在の親子関係を調べる前に、親との同居の有無を調べた。その結果を表12、表13に示した。父親については、高校群と中退群で別居している者は1割以下であるのに対し、補導群では2割強であった。母親については、どの群とも別居している者は1割以下であった。現在の親子関係を調べる上で、父親母親ともに死別の者を除いた。

表12 父親との同居の有無

	高校群 (%) 〈男・女〉	補導群 (%) 〈男・女〉	中退群 (%) 〈男・女〉
同居	1452 (87.4) 〈857・595〉	111 (73.0) 〈63・48〉	42 (85.7) 〈35・7〉
別居	161 (9.7) 〈86・75〉	35 (23.0) 〈12・23〉	4 (8.2) 〈1・3〉
死別	49 (2.9) 〈28・21〉	6 (3.9) 〈5・1〉	3 (6.1) 〈2・1〉
計	1662	152	49

表13 母親との同居の有無

	高校群 (%) 〈男・女〉	補導群 (%) 〈男・女〉	中退群 (%) 〈男・女〉
同居	1581 (94.8) 〈916・665〉	134 (88.2) 〈68・66〉	44 (89.8) 〈35・9〉
別居	72 (4.3) 〈51・21〉	15 (9.9) 〈9・6〉	4 (8.2) 〈2・2〉
死別	14 (0.8) 〈8・6〉	3 (2.0) 〈3・0〉	1 (2.0) 〈1・0〉
計	1667	152	49

現在の父親との関係を「あなたは現在、お父さんとうまくいっていますか?」という質問文で尋ねた結果を、表14に示す。「とてもうまくいっている」及び「まあうまくいっている」と答えた者を合わせると、現在父親との関係がうまくいっていると答えた者は、高校群で8割、中退群で6.5割、補導群で4.5割であった。特に補導群において現在の父親との関係がよくない者が半分以上いることは問題といえる。



表14 現在の父親との関係

	高校群 (%) 〈男・女〉	補導群 (%) 〈男・女〉	中退群 (%) 〈男・女〉
とてもうまくいっている	449 (28.9) 〈260・189〉	10 (7.7) 〈7・3〉	13 (30.2) 〈12・1〉
まあうまくいっている	806 (51.8) 〈476・330〉	48 (36.9) 〈29・19〉	15 (34.9) 〈13・2〉
あまりうまくいっていない	192 (12.3) 〈114・78〉	47 (36.2) 〈22・25〉	11 (25.6) 〈7・4〉
まったくうまくいっていない	109 (7.0) 〈60・49〉	25 (19.2) 〈12・13〉	4 (9.3) 〈2・2〉

現在の母親との関係を「あなたは現在、お母さんとうまくいっていますか?」という質問文で尋ねた結果を、表15に示す。「とてもうまくいっている」及び「まあうまくいっている」と答えた者を合わせると、現在母親との関係がうまくいっていると答えた者は、高校群で9割、中退群で8割弱、補導群で6割弱であった。特に補導群において現在の母親との関係がよくない者が多いといえる。

表15 現在の母親との関係

	高校群 (%) 〈男・女〉	補導群 (%) 〈男・女〉	中退群 (%) 〈男・女〉
とてもうまくいっている	565 (34.8) 〈279・286〉	19 (13.3) 〈10・9〉	16 (36.4) 〈12・4〉
まあうまくいっている	880 (54.3) 〈546・334〉	65 (45.5) 〈34・31〉	18 (40.9) 〈15・3〉
あまりうまくいっていない	127 (7.8) 〈85・42〉	38 (26.6) 〈19・19〉	6 (13.6) 〈4・2〉
まったくうまくいっていない	50 (3.1) 〈35・15〉	21 (14.7) 〈10・11〉	4 (9.1) 〈3・1〉

現在の家庭の雰囲気を「あなたの家庭の雰囲気はなごやかで楽しいですか?」という質問文で尋ねた。その結果を表16に示した。現在の家庭の雰囲気で楽しいと答えた者が、高校群では8割、中退群では6割強、補導群では5割弱であった。特に補導群では家庭の雰囲気が楽しくないと答える者が半分以上いることは問題である。

表16 現在の家庭の雰囲気

	高校群 (%) 〈男・女〉	補導群 (%) 〈男・女〉	中退群 (%) 〈男・女〉
いつも楽しい	652 (39.5) 〈334・318〉	27 (17.6) 〈14・13〉	14 (28.6) 〈11・3〉
ときどき楽しい	656 (39.7) 〈401・255〉	46 (30.1) 〈27・19〉	17 (34.7) 〈14・3〉
余り楽しくない	256 (15.5) 〈181・75〉	56 (36.6) 〈27・29〉	17 (34.7) 〈13・4〉
全く楽しくない	87 (5.3) 〈53・34〉	24 (15.7) 〈12・12〉	1 (2.0) 〈0・1〉

以上まとめると、現在の親子関係では、どの群も母親の方が父親に比べて関係が良い者が多い。これは中学時代の親子関係の善し悪しと一致する。中学時代と同様に、高校群、中退群、補導群の順に関係が悪い者が多くなる。特に、補導群では母親との関係が悪い者が4割、父親との関係が悪い者が5.5割いたことは、中学時代の結果とほぼ同様である。補導群では中学時代に引き続いて現在も親子関係が悪い者が半分近くおり、特に父親との関係が悪い者は半分以上いることがわかった。このことは家庭の雰囲気の回答とも対応し、家庭の雰囲気を楽しくないと答えた者が補導群では半分以上いた。これに対し、高校群では楽しくないと答えた者は2割であった。

### 3. 誰といるときに最も大切な時間か

誰と過ごすときに最も大切な時間なのかを尋ねた結果が、表17である。高校群では一人での時と答えた者が3割、友達と答えた者が4割であった。補導群で友人といる時と答えた者が6割弱おり、恋人と答えた者が2.5割いた。中退群では一人での時と答えた者が5割おり、友人と答えた者が2.6割、恋人と答えた者が2割いた。中退群では、一人の時間を最も大切と答えた者が半分いることが特徴的である。

表17 最も大切な時間

	高校群 (%) 〈男・女〉	補導群 (%) 〈男・女〉	中退群 (%) 〈男・女〉
一人	461 (29.5) 〈285・176〉	15 (10.0) 〈9・6〉	23 (50.0) 〈16・7〉
友人	651 (41.6) 〈388・263〉	86 (57.3) 〈44・42〉	12 (26.1) 〈11・1〉
恋人	211 (13.5) 〈145・66〉	38 (25.3) 〈18・20〉	10 (21.7) 〈9・1〉
家族	242 (15.5) 〈112・130〉	11 (7.3) 〈9・2〉	1 (2.2) 〈1・0〉

## 考 察

E.H.Erikson (1959) によるライフサイクル論によると、人間の一生は、誕生から、親の養育を得て成長し、学校、そして社会へと、親から離れ今度は自分が親になり、子どもを育て、そしてその子どもがまた親としての自分から離れていくというプロセスをたどるといえる。彼によるとそのプロセスの中で、重要な対人関係の範囲も変化していく。乳児期では母親との関係が重要であり、幼児期では両親との関係が重視される。児童期にはいと仲間、つまり同性の友人との関係の比重が増し、青年期では異性への興味が増加し、成人期になり結婚を経て配偶者へと対人関係の重点は移る。子どもが生まれると自分の家庭ができ、自分の家族が自分にとっての大切な場となっていく。

ライフサイクル上のこの様な対人関係の変遷の中で、青年期の対人関係に注目してみる。青年期とは、身体・心理・対人関係・社会の側面における変化が起こる時期であり、危機的な期間であるとされている (Erikson, 1959)。青年期の対人関係の変化の主たるテーマはいわゆる親離れ、心理的独立であることはいうまでもない。P.Blos (1962) は、青年期の心理的発達を前青年期・青年期前期・青年期中期・青年期後期・後青年期に区分し、親からどのようなプロセスで自立が行われ、その中でどのような心理的メカニズムが生じているかを詳細に述べている。前青年期はいわゆるギャングエイジと呼ばれ、排他的な仲間集団での遊びが見られる。青年期前期には、第二次性徴が生じ親からの心理的離乳が起こる。このとき親から離脱した心理的エネルギー (リビドー) が同性の友人に対して投資される。このようにして、親との関係から同性の友人との関係へと対人関係の重点が移行する。この様な同性との友人関係の段階を同性愛的段階という。青年期中期に入り、エディプス葛藤の再燃により、異性の親に投資されていたエネルギーが撤去され、自分に向かうようになる。このため自己愛的段階に移行する。こののち、異性との交流を経て異性愛的段階に移行する。以上のような Erikson 及び Blos の対人関係の発達をまとめると、親つまり家庭から同性の友人を経て、異性へと変化していくといえる。

高校群では、概ね中学時代及び現在を通して、父親と母親との関係もうまくいっていると答え、しかも、同性の友人関係にも満足していると答えており、親子関係及び同性との友人関係ともに、良い関係であるといえる。このことから、親から同性への対人関係の重点の移行がスムーズに行われていると考えられる。加えて、高校群で最も大切な時間は、一人でいる時と答えた3割の者は Blos のいう自己愛的段階にあると考えられ、友人と答えた4割の者は同性愛的段階にあるといえる。

補導群で、父親との関係・母親との関係・家庭の雰囲気が良くないと答えた者がほぼ半数近くいたことと、最も大切な時間を友人といる時と答えた者が6割弱、恋人と答えた者が2.5割いたことを合わせて考えると、次のようになる。補導群で親との関係がよくないとした約半数の者は、対人関係の重点を家庭から強引に友人や恋人に移行させているのではないか。つまり、親では得られぬものを、友人や恋人に求めていると考えられる。補導群における異性の友人との関係の満足度は、他の群と比べ満足であると答えた者が8割と多く、この点からもかなり強引に Blos のいう異性愛的段階に移行している者がみられる

と予想される。心理的発達という点から異性愛的段階を捉えると、この段階では異性との精神的な交流が必要であり、限界を超えた交流は心的外傷になる(皆川, 1980) という指摘もされている。補導群で、先に述べた親では得られぬものを友人や恋人に求めるという、心理的メカニズムがそこで行われているとすれば、心理的発達においてこれをどう克服するかが問題とされる。

中退群では、最も大切な時間は一人でいる時と答えた者が5割いたことが特徴的である。中退群の者は同性の友人がいるものの、半数の者は一人の世界に重きを置いている。これらの者は、対人関係の段階が自己愛的段階にあると考えられる。家庭から家庭外へと対人関係はその重点を移していくのであるが、中退群のこれらの者は対人関係に向かうエネルギーを自分自身に投資し、自分自身に引き籠っている状態にあるといえる。人間の一生の発達の中で最も大切な時期は、思春期(青年期と本文では同義に考える)にはいって異性との関係がないうちの同性との友人関係である(Sullivan, 1953)と指摘されている。この点から、自分自身へと引き籠った彼らの心理的発達が今後どのようにプラスに向かうかと考えると、もう一度同性との友人関係に戻って対人関係の発達のプロセスをやり直すことが必要ではないかと考えられる。

#### 引用文献

Blos, P. (1962) On Adolescence. Free Press.

(「青年期の精神医学」野沢栄司訳 誠信書房 1971)

Erikson, E.H. (1959) Psychological Issues : Identity and the Life Cycle.  
International Universities Press.

(「自我同一性」小此木啓吾編訳 誠信書房 1973)

皆川邦直 (1980) 青春期と青年期の危機 「臨床社会心理学2 統合と拡散」  
小此木啓吾・小川捷之編 至文堂

Sullivan, H.S. (1953) The interpersonal theory of psychiatry.  
W,W,Norton & Company.

(「精神医学は対人関係論である」中井久夫編訳 みすず書房 1990)